

このたび『クリニカルエビデンス・コンサイス issue16 日本語版』が医学書院から出版されたことは、わが国で医療に携わる全員にとって大きな喜びである。まずは、ご苦労なさった葛西龍樹教授はじめ翻訳に携わった皆様、出版社の皆様に謝意を表したい。Clinical Evidence は英国医師会出版部(BMJ Publishing Group)が総力を挙げて作り出した EBM パイプルの1つである。その日本語版は葛西教授が中心となつての献身的な努力で2001年に原書第4版の日本語訳が出版され、2002年に第6版、2004年には第9版が出版されたことは周知のとおりだが、その後、諸般の事情で出版が途絶えていたものである。今回、第16版の日本語版が装いも新たに出版されたことは、わが国の医療界にとって大きな福音であると言っても過言ではないであろう。

Clinical Evidence を利用する医師数は世界で100万人を超えていると言われ、現在、7か国語への翻訳が実施されている。多くの国では医師会員や医学生に無償配付するなどの措置が執られており、さらに、世界保健機関の協力によって発展途上国ではオンライン版が無償提供されていると聞く。このように、Clinical Evidence は世界中の医療にとって、質向上のライビングフォースとなっていることは明らかであり、わが国の医師・医療者が日本語で利用できることの意義は計り知れず大きいと言える。

さて、第16版では26領域226疾患における臨床上の疑問が取り上げられている。しかも、専門医にとっても有益な最新の治療に関するものから、肥満症に対する薬物療法の効果、大腸癌スクリーニング、さらに、成人の便秘に対する生活習慣介入の効果まで、プライマリーケアを担当する医師が日常診療で出会う重要な問題を選びすぐて解説を提供している点が大きな特徴である。

情報は臨床上の疑問ごとに提供されており、疑問への回

答は有益性の分類として、「有益である」、「有益である可能性が高い」、「有益性と有害性のトレードオフ」、「有益性に乏しい」、「無効ないし有害である」、「有益性不明」のいずれかが示されている。本書の解説によれば、取り上げた疑問の回答の中で、「有益である」は14%であるのに対して、47%は「有益性不明」に分類されているとのことである。すなわち、有益性の判断が明確なもののみを取り上げるのではなく、有益性が不明でも、臨床上、重要な疑問であれば、それを積極的に取り上げている点も特徴である。不明となっている事項については英国 National Health Service(NHS)の Health Technology Assessment Program (HTA)にフィードバックすることで評価検討の推進にも一役買っている。

また、各事項の最後には参考文献がリストされており、必要に応じて読者自身が原典に立ち返って、評価検討ができるように配慮されている。数年前になるが、私たち自身が行っている医療情報サービスの開始に当たり、日本医師会会員と病院勤務医に望ましい情報提供についてアンケート調査を行ったことがあるが、予想を遙かに超える多くの医師が、推奨のみでなく、必要に応じて原典に立ち返れるように根拠となった論文の情報提供を求めていることが明らかとなった。この点からも本書の構成はEBMを実施する医師にとって座右に置きたい書であると言える。

最後に、本書の刊行が再開したことで、クリニカルエビデンス・コンサイス日本語版が、原書のほうのバージョンアップにあわせて、引き続きタイムリーに刊行されることを多くの医師・医療者が願っていることを申し添えて、書評を終わりたい。

A5変型・頁1432・定価11,550円(本体11,000円+税5%)
2007年 [ISBN978-4-260-00395-7] 医学書院刊